なぜ大戸川ダムと川上ダムはつくり
余野川ダムはつくらないのか？

藻川の堤防を考える会　細川　ゆう子

１. 第一期委員会の議論をふりかえってみよう

そもそもの混乱は、2003 年１月の流域委員会提言と前後して発表された河川整備計画第一稿であった。現委員長の宮本さんが講演などで発言されているとおり、二期までの流域委員会では基本高水についての議論はなかった。唯一、狭窄部上流だけは「河川整備の方針」において「既往最大規模の洪水に対する浸水被害の解消を目標として狭窄部上流における対策を検討する。」と計画規模が決められた。

ところが猪名川では、昭和 46 年の工事実施基本計画より計画規模が大幅に大きくなってしまった。そのため、その後の二年間、猪名川部会は「銀橋上流部会」と呼びたくなるほど、大きすぎる既往最大洪水に悩まされた。挙句の果てに、どんな施策を考えても既往最大で浸水被害を解消できないので、目標を既往第二位にするしかなかった。

一方で他の狭窄部では、計画規模が小さくなってしまった。特に川上ダムを抱える上野盆地では、既往最大実績降雨だと、上野遊水地だけで浸水被害が解消することがわかった。そこで河川管理者は、既往最大規模降雨で検討することにした。上位 10 洪水を既往最大実績降雨量に引き伸ばして検討したのである。流域委員の中には「既往最大実績降雨なら実際に降った雨だから説得力があるが、既往最大規模では住民の理解を得られないのではないか」との意見もあった。しかし、この当時の河川管理者の主張は守りたい地域が明確で、その真剣な取り組みは評価できた。ただし 10 洪水のうち実績ではダムがなくても被害はなく、5 洪水はダムがあっても被害があり（河川管理者は「浸水家屋を減らせるので効果はある」と主張する）川上ダムができて被害が解消するのは 10 のうち 4 洪水という結果を、ダムをつくる十分な根拠とは思えなかった。さらに今本先生の指摘で、岩倉峡の水位流量曲線は二度にわたって修正された。河川管理者は、修正後も十分に検討したのだろうか。以前のように資料をどんどん出してくれないので、わからない。

大戸川ダムは、現地視察に行くと川と民家が離れていて、そのあいだは田園風景である。大戸川が氾濫して浸水被害にあうのは数百戸。ただしダムをつくって被害が解消するのは、上位 10 洪水のうち 6 洪水のみである。大戸川ダムができても、被害がなくなるわけではない。大戸川ダムの住民対話討論会（円卓会議）では、推進派住民が「われわれのために下流の住民が

ダムの費用を負担してくれてもいいはずだ」との発言をくりかえしていた。彼らは、大戸川ダムができても被害がなくなるわけではないと知っているのだろうか。

２. 大戸川ダム・川上ダムは、淀川に対して「きわめて限定的な」効果しかない

今回の原案、河川管理者は、桂川などの河道改修にともなう下流への流量増を抑制するために、川上ダムと大戸川ダムを必要としている。二期までの説明とまったく違うのは、上野盆地や大戸川流域の浸水被害の軽減より、下流淀川の水位低減効果を強調していることだ。中上流の治水事業は、まず下流の手当てを行うことが鉄則だという。だから下流は堤防補強を行う。それが済んだら、中上流の浸水被害を解消する対策を行う。ずっと、そう教わってきた。

そこでわからない。下流の手当てが済んだのに、なぜその上に下流への流量増を抑制しなければならないのか。流下能力が不足する地域の浸水被害を解消したければ、ダムに貯水するか、流域に遊水させるか、疎通能力を上げて下流へ流すか、いずれかしかないのは当たり前だ。貯水も遊水もさせなければ、下流が流量増になる。流量増にならないために、いちいち上流にダムをつくらなくてはならないのか？そんなことをしていたら、中上流の河道改修は進まないではないか。

だいいち、河道改修による流量増を抑制したいなら、その直上流にダムをつくるべきだ。桂川の改修に川上ダムや大戸川ダムで流量を抑制するなどというのは、単なる数あわせだ。桂川で雨が降るとき、大戸川は降っているか？前深瀬川は？猪名川では、余野川ダムの集水面積が流域全体の 10%に満たないことから「ダムの効果はきわめて限定的である」と、第一期流域委員会は断じている。相手は淀川である。大戸川ダムも川上ダムも、下流淀川に対しては「ダムの効果はきわめて限定的」ではないのか。

３. 余野川ダムの選択との矛盾

余野川ダムと比較するとどうか。余野川ダムは、原案においても「当面実施しない」とされた。2004 年のダムワーキングで河川管理者は、余野川ダムの猪名川下流に対する水位低減効果は最大 20cm ほどで、昭和 35 年８月の既往最大実績降雨で、ダムなしだと戸の内で計画高水位を超え、ダムありだと計画高水位を下回るとのシミュレーション結果を示した。（第２回余野川ダムサブ WG 資料）既往最大実績降雨で計画高水位を超えたにもかかわらず、河川管理者の判断は「費用的に不利であるので、余野川ダムは建設せず下流の堤防補強に代える」であった。また、銀橋狭窄部の開削による流量増に対する対策は、下流の河床掘削であった。

川上ダムや大戸川ダムと話が違うではないか。両ダムの論理でいけば、既往最大実績降雨で下流が計画高水位を超えるので、余野川ダムはつくるべきではないのか。銀橋狭窄部の開削による流量増に対しては、猪名川本川上流に新たにダムを建設しなくてはならないのではないか。猪名川はダムなしで対応しておいて、なぜ淀川本川ではそうしないのか。今回の原案は、論理が一貫していない。

４. ダムの輪廻

原案では、川上ダムにダムのアセットマネジメントのための容量が加わった。提言前のダムワーキングで河川管理者に「ダムはどれぐらい使い続けられるのか？寿命が尽きたら撤去したり作り直したりする費用は、建設費用に含まれているのか？」と尋ねたことがある。「コンクリートは半永久的にもつと考えているが、堆砂容量がいっぱいになることはある。撤去や建て直しの費用は、ダム建設の費用には含まれていない」という答えだった。はっきり言って、あきれた。会社や家庭で、減価償却の費用を確保せずに物を使えるか？ダムの寿命が尽きたら、無用の長物と化し、建て替えることも撤去することもできないのだ。河川管理者は、今ごろそのことに危機感を持ち始めたのか。ダムの延命のために新たなダムがいると言う。

それでなくてもダムの当初予算は、実際にかかる費用よりはるかに少ない。先日も河川管理者は、またしても記者発表で、300 億も膨らんだ費用を公表した。神経がおかしくなっているとしか思えない。彼らが使うと決定した予算は、国民が税金として納めたものだ。子供だって「100 円だ」と言ってお金をもらって買ったノートが 150 円もしたら、申し訳なさそうな顔をする。「時間がかかったので物価が上がった」なんて言い訳で済むことか。時間がかかるのはわかっているのだから、物価の上昇くらい最初から織り込み済みにすべきだ。「安い」と言って契約させておいて、あとから値上げしたら詐欺じゃないか。

ダムの延命のためにダムがいるのなら、それはつくったダムの費用をさらに膨らませるのと同じことだ。ダムのメンテナンスの費用が、新たなダム一個分というのは高すぎる対価ではないか。その費用を国民に払わせ続けるのか。そのことに何の痛みも感じないのなら、河川官僚はもはや正常な神経を失っているとしか思えない。

ダムの輪廻は断ち切らねばならない。ダムの目的は、水の不足する住民を救うとか、水害から住民の命を守るとか、誰にでも同意できるものであるべきだ。莫大な国民の血税を費やすにふさわしい目的なしにつくるべきではない。